東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2005 年 12 月 16 日

巡礼

ムスリムの皆様。崇高なるアッラーは「この家への巡礼は、そこに赴ける人びとに課せられたアッラーへの義務である。背信者があっても、まことにアッラーは万有に（超越され）完全に自足されておられる方である。」（イムラーン家章９７節）とおおせられ、一定の条件を満たしている人々を巡礼に招かれました。この神聖なるお招きに、この巡礼の季節において応じている兄弟姉妹の信者の人たちは、崇高なるアッラーからの招待客として、アッラーの家を訪問する名誉と喜びを手にしているのです。

親愛なるムスリムの皆様。暮らしにおける信仰の反映であるイバーダは、崇高なる創造主との間の、最も強固な、そして最も素晴らしいつながりです。このイバーダの一つである巡礼は、個人的、かつ社会的な面で成熟をもたらす多くの特質を備えています。世界各地からやってきた、言葉も、種族も、色も、文化も、経済状況もことなる信者たちが、同じ信仰と思いのうちに出会い、兄弟として結びつく機会を与えます。巡礼は、預言者たちの許しによって、高められ、アッラーのご満悦を得ることのできる道において実現化された、英知に満ちた旅路です。この旅路において信者たちは信仰を強固にすると同時に、アッラーを畏れること、忍耐すること、愛情、敬意、兄弟愛、献身、気前のよさといった多くの美徳を実践する機会を得ます。

親愛なるムスリムの皆様。巡礼においては、礼拝、タワーフ（カーバ神殿を回巡すること）、サーイ（サファとマルワの二つの丘の間を七度駆け足で往復する儀式のこと）タルビーヤ、アラファトでの滞在、悔悟、犠牲、イフラームなどによって成り立つ多くのイバーダやアッラーの命令に従うことで、人々は喜びの中にあります。財産、富、子供、親戚などは後に残し、イフラームによってアッラーの御前で、「ラッバイカ　アッラーフンマ　ラッバイカ（あなたのお招きに従い、御前に参りました）」と唱えながら、アッラーへの従順を明らかにした信者たちは、日常の仕事やわずらわしさから遠ざかり、完全なやすらぎに満ちた心で、　アッラーの御前に向かう機会を得るのです。

この聖なる旅において実行されるイバーダにも、多くの英知が秘められています。カーバ神殿の周囲を周回することは、アッラーを高め、シャイターンに投石し、あらゆる悪を放棄すること、アラファトでの滞在は、アッラーのご満悦を得ることを何よりも優先させ、イフラームの禁止事項に従い、アッラーのご命令に応じること、犠牲は、アッラーの道のために何かを捧げることの象徴として考えると、巡礼におけるイバーダに新たな意義と素晴らしさを見出すことができるでしょう。

この旅路において、巡礼者たちが最も注意しなければいけない点のうちの一つが、忍耐強く、我慢強くあるべきだ、という点です。巡礼者たちは、イフラームの状態であることを常に認識し、過ちを目にせず、あらゆる命あるものに対し愛情と慈しみをもって接するよう、努めなければなりません。そこでの時間を、イバーダやアッラーのご命令への服従で有意義に費やさなければなりません。買い物、市場といったことで必要以上に時間を費やすべきではないのです。心からの悔悟と、承認された巡礼によって、アッラーの御前に立つことを意識した巡礼者たちは、預言者ムハンマドの「巡礼を行なった人は、母から生まれた日のように、罪から清められている。」という吉報にふさわしい人となるでしょう。

本日のフトバを、次の章句によって締めくくりたいと思います。

「人びとに、巡礼〔ハッジ〕するよう呼びかけよ。かれらは歩いてあなたの許に来る。あるいは、どれも痩せこけているラクダに乗って、遠い谷間の道をはるばる来る。それは自らの（現世と来世の）御利益に参加し、また定められた日の間、かれがかれらに与えられた（犠牲の）家畜の上にアッラーの御名を唱え、それから『あなたがたはそれを食べ、また困窮している者にも食べさせなさい。』それからかれらの必要な儀式を終え、誓いを果し、そして古来の家（カアバ）を、タワーフしなさい。」（巡礼章２７－２９）